

被援助場面における感謝感情と負債感情が
向社会的行動に及ぼす影響過程

平成 30 年度

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 心理学専攻

博士論文

学籍番号 201630329

吉野優香

論文要旨

本論文は、先行研究において被援助場面において受益者が利益供与者に対して経験する、ありがたい感情（感謝感情）とすまない、申し訳ない感情（負債感情）が相反する感情として扱われてきた問題に焦点を絞り、感謝感情と負債感情が共起することを前提とした場合における、感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

感謝感情が向社会的行動に及ぼす影響は、先行研究では動機の質的な側面に言及されていないことから、本論文では向社会的行動を行う「制御焦点理論に基づいた動機」の観点を採用した。また、感謝感情と負債感情を同時に扱うにあたり、両感情が向社会的行動に及ぼす影響の差異への言及が求められることから、利益供与者への向社会的行動と第三者への向社会的行動を区別した「向社会的行動の対象者の種類」を考慮する必要がある。さらに、感謝感情と負債感情は、対人的な感情であることから、向社会的行動の対象者との関係性が新規であるか既存であるかを区別した「向社会的行動の対象者との関係性」を検討点に加えることにより、両感情が向社会的行動に及ぼす影響過程の差異が顕著になると考えた。本論文では、以上3点の検討点を各研究における「目的」として考慮に入れて、感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響過程を明確にすることを試みた。

理論的検討は、第1章から第4章において行い、第5章と第6章によって実証的検討を行った。第5章の研究1, 2では、感謝感情と負債感情の共起を確認するため、被援助場面を提示した場面想定法による質問紙調査を行った。Wood et al. (2008) モデルの再現性の確認をし（研究1）、そのモデルの拡張によって、感謝感情と負債感情の共生起過程モデルを示した。感謝感情と負債感情の共生起過程モデルからは、両感情は、被援助内容に関する利益供与者が支払った「コスト」、利益供与者の「誠実性」、受益者にとっての「価値」に関する認知的な主観的評価の総体である「利益の評価」の高低に基づき規定され、同一場面で共起することが明らかになった（研究2）。

研究3では、感謝感情と負債感情が共起する場合における感情操作の検討と、共起した両感情の特徴の検討を目的とし、感情喚起手法の1つである「感謝の手紙」を用いた質問紙調査を行った。研究4では、研究3と同様の目的で、他の感情喚起手法の1つである「感情経験の追体験」を用いた実験室実験を行った。調査対象者が作成した「感謝の手紙」の内容は、「友人へ向けた感謝の手紙」、「他人へ向けた返報を希望する手紙」、「返報の

不完全さに伴う負債の手紙」，「支援に伴う成長を報告する手紙」の4種類を確認できた（研究3）。感謝感情と負債感情は，共起するが常に同程度の経験がされるのではなく，感謝感情の経験だけが強く，負債感情の経験が弱い場合と，感謝感情と負債感情の経験がともに強い場合があると示された（研究3，4）。以上の研究1から研究4によって，感謝感情と負債感情の共起を明らかにし，両感情が共起することを前提とした本論文における研究の基盤を築いた。

第6章では，第5章によって示された感謝感情と負債感情の共起に関する前提や実験手法に基づき，感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響過程の検討を目的とした研究を行った（研究5～10）。研究5では，2点の質問紙調査によって，制御焦点理論に基づく動機の測定項目を作成し，その内容的妥当性を確認した。感謝感情と負債感情が共起する前提における，特性感謝，特性負債感と特性的な制御焦点動機との関係を検討し，両感情が相反する前提における同様の検討である Mathews & Shook（2013）とは異なる結果を示した（研究5-1）。特性同士の間関係を考慮したうえで，制御焦点理論に基づく動機である促進焦点動機と予防焦点動機を測定する各4項目を作成した。促進焦点動機と予防焦点動機は，特性的な制御焦点および行動抑制／行動促進理論の各ドライブと，想定された関係を示し，制御焦点動機の測定項目の内容的妥当性を確認した（研究5-2）。

研究6，7では，向社会的行動の対象者が利益供与者である場合の感謝感情と負債感情の影響を検討することを目的とし，友人ペアによる実験室実験（研究6）と，被援助場面と援助場面の2場面を提示する場面想定法を用いた質問紙調査（研究7）を行った。向社会的行動の対象者が利益供与者でありかつ，その対象者との関係性が既存，友人であるときには，両感情の喚起は，感謝感情と負債感情がともに強く経験されている場合において利益供与者に対して向社会的行動をとらせた（研究6）。その影響過程は，向社会的行動の対象者が他人であったとき，感謝感情は，向社会的行動への抑制の影響をもちながらも，促進焦点動機，予防焦点動機のどちらも高め，間接的に向社会的行動を促進した。友人であったときも，感謝感情は，向社会的行動に直接の影響は持たないが，促進焦点動機，予防焦点動機のどちらも高め，間接的に向社会的行動を促進した。他方，負債感情は，向社会的行動の対象者が他人であったとき，向社会的行動に直接的な影響を及ぼし，かつ，促進焦点動機，予防焦点動機のどちらも高め，向社会的行動を促進した。友人であったとき，負債感情は，向社会的行動に直接的な影響を及ぼし，かつ，促進焦点動機を高め向社会的行動を促進した。また負債感情は予防焦点動機を高めなかった（研究7）。

研究 8, 9 では、向社会的行動の対象者が第三者である場合の感謝感情と負債感情の影響を検討することを目的とし、排斥された他人への向社会的行動を測定する実験室実験（研究 8-1, 8-2）と、場面想定法を用いた質問紙調査（研究 9）を行った。向社会的行動の対象者が第三者でかつ、その対象者との関係性が新規、他人であるときには、両感情の喚起は、感謝感情の経験だけが強く、負債感情の経験が弱い場合と、感謝感情と負債感情の経験がともに強い場合のどちらにおいても、コストのかかる向社会的行動をとらせた（研究 8）。その影響過程は、向社会的行動の対象者との関係性にかかわらず、感謝感情は、促進焦点動機、予防焦点動機の両方を高めることにより向社会的行動を促進し、負債感情は、予防焦点動機を高めることにより向社会的行動を促進した（研究 9）。

研究 10 では、日常で経験する感謝感情と負債感情が向社会的行動の実行コストに及ぼす影響を検討するために 15 日間の日誌法を行った。日常で経験される感謝感情の程度は、予防焦点動機を介することで、より高コストな向社会的行動を翌日に行わせやすくすることが示され、負債感情は、直接、より高コストな向社会的行動を翌日に行わせやすくすることが示された。

第 5 章、第 6 章に含まれる研究は、いずれの研究も日本人大学生を対象とした。

第 7 章の前半では、これまでに得られた結果を整理したのち、感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響に関する新たな説明の可能性を提言した。本博士論文で得られた知見は、感謝感情と負債感情が共起する前提や、両感情がともに、利益供与者だけでなく第三者に対する向社会的行動を促進することを示したが、感謝感情、負債感情と制御焦点動機における促進焦点動機、予防焦点動機、そして向社会的行動の関係は当初予想した関係とは異なっていた。

そこで、感謝感情と負債感情の経験が強いほど、向社会的行動の実行に支払うコストが高くなる結果（研究 10）に基づき、プライミングとモデリングの観点から、得られた結果に関して次のような、新たな説明を試みた。感謝感情と負債感情は、認知的な評価の総体である「利益の評価」により生じるが、受益者は、「利益の評価」を構成する過程で、援助に対する「コスト」「誠実性」「価値」へのプライミングの影響を受け、利益供与者をモデルとしたモデリングを行う。そのため、受益者自身が利益供与者となる場合に、感謝感情と負債感情の経験を引き起こした、「利益の評価」と同等の向社会的行動を行い、向社会的行動の対象者の種類やその対象者との関係性から影響を受け、向社会的行動の動機が変容する。第 7 章前半では、以上を感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響の説明として提言した。

第 7 章後半では、本論文の貢献について言及した。感謝研究に対する本論文の貢献は、次の

3点である。第一に、感謝感情の経験は、他のポジティブ感情と同様に、自己の良好な状態の維持のために向社会的行動を避ける可能性を示した。感謝感情は、利益供与者への向社会的行動に対して、制御焦点動機を介することにより正の影響を与えていたが、感謝感情が個別に持つ向社会的行動への影響は、抑制や無影響であった（研究7）。この結果は、感謝感情は、ポジティブ感情の中でも特別な感情であるとする従来の主張と反する結果であり、制御焦点動機の存在や負債感情の共起の価値を見出すことができた。

第二に、感謝感情と負債感情が向社会的行動の実行コストに及ぼす影響に着目したことにより、新たに感謝感情と負債感情が向社会的行動に及ぼす影響を説明する背景を見出した。本博士論文で得られた結果に対する説明として、プライミングやモデリングの観点からの説明を示した（第7章）。この観点は、まだ検討されていないため、感謝研究に対して新たな視座をもたらす可能性がある。

第三に、教育分野へ貢献する可能性のある知見を提出したことである。本論文において、感謝感情と負債感情の規定因「利益の評価」を示したこと（研究2）と、向社会的行動を促進する感謝感情と負債感情の影響の背景に関する言及（研究10）から、既存の感謝感情のトレーニングに基づいた新たな感謝感情と負債感情のトレーニングの開発や、向社会的行動の実行に関するトレーニングの理論的基盤となる可能性がある。（3994/4000字）